

火の鳥第2部—未来編2（手塚治虫 S42年）

西暦3404年—地球は急速に死にかかっていた。かつてそこには強大な帝国があった。そして生きるもののしあわせとやすらぎと愛の賛歌とがあふれていた。だが今ではわずかに点在する沼と、あとは……あれてはすぐ枯れてゆく、はてしない下草の荒地だけであった。人類はいっさいを地下へ持ちこんだ。地下だけが残された最後のとりでだった。

人々は、ここに「永遠の都」をつくった。「永遠」とつけたのは、襲ってくるさみしさを忘れようとするためだった。「永遠の都」は世界に5か所あり、それぞれ、ユーオーク、ピンキング、レングード、ルマルエーズ、およびヤマトと呼ばれていた。どの都会にも、500万人もの人が住んでいたのである。そして、ここ、メガロポリス・ヤマト中心部のネオミヤコ広場は、今日も各ビルからはきだされるホワイトカラー族でひしめている。だが、その群集の顔、顔、顔はなんとなくひよわで、かぼそく無気力にみえた。……(p4)

「若きウエルテルの悩み（ゲーテ）」か……(猿田博士)

『わたしは どれほどまでに わたしの頭上を飛ぶツルの翼をかりて あのはかりしれぬ海のかなたの岸へゆくことを願ったろう。無限の泡立つさかずきからあふれる人生のよろこびを得ることを熱望したろ

う！ただ一瞬でもわが胸のかぎられた力のなかにあらゆるものを自己によって作りだす、まことの幸福の一しづくでもあじわおうと願ったろう……。』(ゲーテ)

「 わしも昔はこれを読んで情熱をかきたてたものだった…… 」(猿田博士)

『 春の風よ！なぜおまえは私をよびさますのだ。おまえはこびなगराいう。空の露にうるおすと！けれどもわたしの枯れしぼむときはもう近い。わたしの木の葉を打ち落とす風もまじかに吹くだろう。美しいわたしの姿を見おぼえた旅人は、あすやってきて野のあちこちを見まわしてわたしの姿をさがすだろう。けれども……ああ、わたしはもう旅人の目には、はいるまい……。 』(p 43)

「 博士 あなたのイメージの神というものが どんなものかわかりませんが 少なくとも私は神の使いではありません でも 使いです いいえ はっきりいうと …… 分身なんです 」(火の鳥)

「 地球は生きているのですよ 生き物なのですよ その地球が いま 死にかかっているのです 人間が病気でたおれるように 地球も病気にかかって死にそうなのです 地球はあなたがたから見れば大きすぎるからよくわからないのも無理はありません たとえば 細菌だってその寄生している生き物のからだを生きているとは思わないでしょ

う？ 」(火の鳥)

「 じゃ おまえさんはいったいなんだ！！ 」(猿田博士)

「 わたし？ わたしは地球のからだの一部なのですよ …… 動ける細胞みたいなもの 」(火の鳥)

「 ウーム わしは気が狂ったらしいわい 」(猿田博士)

「 猿田博士！ 星は みんな生きていますわ もちろん 生きていたって あなたがたの考えている生き物とは異質なものです これは 宇宙生命なのですわ 」(火の鳥)

「 宇宙生命？ 」(猿田博士)

「 太陽も生き物ですし 銀河の中の星星はみんなそうですの 活動している星はみんな『 生きて 』いるのです 宇宙生命とはそういうものです 宇宙生命も あなたがたのように病気になります そして ひからびて 死んでいくのです …… ほんとうならずっと長く いきられるのに …… 」

「 そして …… 地球も病気になったのです かかりはじめは 1 千年ほどまえでした …… この病気の徴候はすぐ地球の上にあらわれてきました 動物はどんどん滅びさっていき ……。人間たちの進歩もばったりとまりました 地上には目にみえない死のかげがただよいはじめ …… 」(火の鳥) (p 5 1)

「山之辺 おぼえてるか？ おれたちふたりが小さいころよく遊んだ中央公園さ 公園にきていたルンペンにソドムとゴモラの話聞いたっけなあ。 ソドムとゴモラってのは聖書にでてくる古い町の名だったことだった。聖書なんてばかばかしいものは、もう百年近くもまえになくなっちゃったが 」(ロック)

「ソドムの人は悪しくて エホバの前に大いなる罪人なりき エホバ硫黄と火をエホバの所より すなわち天よりソドムとゴモラにふらしめ その町と 低地と 人 および 地に生うるものすべてをほろぼしたま えり ソドム・ゴモラのおもてをのぞみ見るに その地の煙 かまのごとくに立ちのぼれり 」

「きみは、人類が神のいかりにふれて 自滅したというのか？ 」  
(マサト) (p 134)

「山之辺！おれと宇宙に逃げんか？ 」(ロック)

「ええ？ 」(マサト)

「このおいさらばえた地球に未来なんかあるものか！ え？ 君もだろう？ すでに地球人が死に絶えたり見放した植民星がいっぱいあるはずだ。 」(ロック)

「うん？ 」(マサト)

「猿田博士の自家用ロケットの格納庫があるだろう？ 」(ロック)

「 ある・・だが・・ 」(マサト)

「 だが・・なんだ・・ 」(ロック)

「 そんなことはできない！！ 」(マサト)

「 うばえないのか！！ 」(ロック)

「 君は地球を見放す気か。ぼくにはできない。 」(マサト)

「 フン おれはもうずっと前から地球なんか逃げだしたかった。おれは中央本部で ときどき自分ながらどうしようもないやりきれなさにおそわれたもんだ。 」(ロック)

「 きみがか？ 鉄面皮のきみが？ 」(マサト)

「 考えてもみろよ・・ 25世紀からこっち 文明ははっきり後退をはじめたんだ。21世紀は まだ人類は はつらつとしていた。宇宙へとびだし あちこちの星に植民星も開拓した。25世紀には人類の文明は絶頂にたった。そのあと衰退がはじまったんだ。おかしい退化だった。原因はだれにもよくわからなかった・・。科学も芸術も少しも前進しなかった。みんなはむしろ昔のスタイルや生活にあこがれだした。30世紀ごろには21世紀ごろの文明にもどってしまっていた。あきらかに人類は・・いや地球は老化現象をたどっていることがわかった。遠い星の植民地もいつのまにかさびれ 死に絶えていった。しがみついてもなんの希望も野心もなくその日その日を送っていた。人口も目に見えて

へっていった。そして、とうとう・・あれはた地上を見限らなければならなくなった。政治屋どもにはどうしていいかわからなかった。苦し紛れにやつらは文明の支配を機械にゆだねた。」(ロック) (p 138)

.....

海よ。わしのこの贈りものをうけてくれ。つまらぬ炭素と酸素と水素のまざりものじゃ。わしの計算がまちがっていなければ、この見知らぬ海岸のかたすみで、有機物が水にとけてコロイドになり、そのコロイドがいくつかまざりあってコアセルベートというゼリーのようなものになり、それが長い長い年月のあいだに、しだいに、原始生命みたいなものになってゆくのだ。何億年たとうと、わしはまつぞ。(マサト) (p 235)

コアセルベートとなった有機物は、やがてあたりの物質をすいとって、自分をふくらましはじめた。ふくらみがある大きさになると、それはふたつに分かれた・・・・。また、長い長い年月がながれ、分裂と吸収をつづけていたゼリーのような物質は、しだいに「生命」をもっているかのような動きをみせはじめた。そしてそれは、もはや、無生物ではなかった。ムチをもったり、毛をもったりして、自分自身の力で、動く原始生命体になっていたのだ。それは、また、いくつもくつつきあって、ひとつの大きなからだをつくっていた。ひとつひとつのつぶも生

きており、大きなからだ全体も生きていたのだ。そして・・自然に植物と動物の区別ができていった・・。植物のほうは、いちはやく陸へ陸へその触手をのぼしていった。空気はなまあたたかく、水滴をふくんでいたので、またたくまに植物は陸を占領した。動物たちとても同じだった。・・・・(p 240)

.....

恐竜だ、爬虫類の世界だ。もうすぐ哺乳類の先祖が生まれる。そして、人類のあけぼのだ。マサトはまった。期待した。・・・・(p 243)

.....

ついに直立して歩くナメクジがあらわれた。それは突然変異で、だしぬけに、2ひき生まれたのだ。その後、その二匹はおそろべきスピードで、子供をふやしはじめた。マサトは、その二匹にやむをえず、アダムとイブと名をつけた。

.....

「あわれな生き物よ。おまえはなぜそんなに生きたいのだ？たかがナメクジのくせに・・」(マサト)

「た・・たかがナメクジですって。ひどいことをおっしゃるな。あなたがだれだかは知らないが、私だって、命はおいしい。」(ナメクジ)

「長生きしてなにになるというのだ？なぜ命をそんなにおしむの

だ? 」

(マサト)

「 そりゃあ、死んじまえばなにもかもパーになるからですよ。 」(ナメクジ)

「 私はおまえの先祖の下等なナメクジを知っているがおまえのようにみれんがましくはなかったし、グチもいわずに死んでいった。はずかしくないのかね。」

(マサト)

「 イヤダ、イヤダ、わたしゃそんな下等動物じゃない!! 死ぬのがこわいんだ。助けてくれえ。 」(ナメクジ)

「 助けたいが、私にはできない。 」(マサト)

「 なぜ、私たちの先祖は、かしこくなろうと思ったのでしょうか。もとのままの下等動物でいれば、もっとらくに生きられ・・死ねたろうに・・進化したおかげで・・ 」(ナメクジ) (p 256)

.....

火の鳥は火山の火口壁に巣をつくってそこへうずくまって思いにふけていた。それは、はてしなく長い年月だった。生物が滅びてまた現われて進化し栄えて滅びた.....

火の鳥の目のまえでなんどくりかえされたことだろう。そしてなんど



めかの間がいままた同じ道をあゆもうとしている。火の鳥はいつも思うのだ。あのナメクジにしたって、高等な生物だったこともあった。ここでも、どうして どの生物もまちがった方向へ進化してしまうのだろう。人間だっておなじだ。どんどん文明を進歩させて、結局は自分で自分の首をしめてしまうのに・・・

「 でも こんどこそ 」 と、火の鳥は思う。

「 こんどこそ信じたい 」

「 こんどの人類こそ、きっとどこかでまちがいに気がついて・・・生命を正しく使ってくれるようになるだろう 」 と。(p 284)

HINGTORI  
**火の鳥**

COM 名作  
コミックス = 2



未来編  
手塚治虫







# 火の鳥

第二部

未来編 2

手塚

治虫



「生命を正しく  
使ってくれるように  
なるだろう」と……